

《2025 年 10 月 公開サロン（通算 348 回）報告》

部活から地域クラブへの運営と課題 新たな価値創出ストーリーの描き方

—サッカーの中に人生があるのではなく、人生の中にサッカーがある—

【日 時】2025 年 10 月 18 日（土）14:00～16:00

⇒ 「目白かつりき」で懇親会（～19 時 30 分過ぎ）～2 次会

【会 場】豊島区立千登世橋中学校 & オンライン（Zoom）

【テーマ】部活から地域クラブへの運営と課題、新たな価値創出ストーリーの描き方

—サッカーの中に人生があるのではなく、人生の中にサッカーがある

【演 者】内田 光侶（PROUDERS 合同会社 COO / 動画生成 AI 脚本家）、
大島香歩（PROUDERS 合同会社 CEO / プラトレリーダー）

【参加者 14 名】 ◎NPO 会員、○会員外のサロンファミリー、無印はサロンファミリー外

対面参加 10 名 ◎石原俊秀（株式会社パルカ）、○磯和明（総合型地域スポーツクラブ「くにたちエール」）、○内田光侶（PROUDERS 合同会社）、○大河原誠二（桐窓サッカー倶楽部／サッカークラブ桐一族／附属 106 回サッカーパー）、大島香歩（PROUDERS 合同会社）、藤村優羽（PROUDERS 合同会社インターン学生）、望月昇（社会人と小中学生にサッカー指導経験あり）、◎嶋崎雅規（国際武道大学）、◎中塚義実（NPO サロン 2002 理事長）、○横尾智治（筑波大学附属駒場中高）

オンライン参加 4 名 木村晃（平山台文化スポーツクラブ）、◎小池靖（株式会社バイタル）、
◎笛原勉（日揮グローバル株式会社）、豊田昌利（PROUDERS 合同会社顧問）

【報告書作成】PROUDERS

【投影資料】「部活から地域クラブへの運営と課題、新たな価値創出ストーリーの描き方」

*公開 URL) https://drive.google.com/file/d/1_A2UZj1BBpJ1WmaoALI65lTib3ihcNVi/view

*動画（黒色スライド）は [TikTok](#) (@proudersist) 、[YouTube](#) (@PROUDERS) にてご覧頂けます

【論点抽出*概要】

I. Agenda

1. 部活動の地域移行と女子サッカークラブの設立
 - ① 学校と地域の連携による新しい教育モデルの模索
 - ② 体験格差の解消と一流本物志向の教育
 - ③ 女子スポーツ参加者の減少問題とその対策
2. 新しい価値創出としてのストーリー作りと AI の活用
 - ① 構想による地域コミュニティの活性化

【キーワード】

部活動地域展開、中学校、豊島区立知登世橋中学校、新たな価値創出、女子サッカー、マルチスポーツ、体育、プラトレ、プラワク、クラブハウス、PROUDERS、内田光侶、大島香歩

II. 女子サッカークラブオペレーションで得た仮説

1. 女子中学生たちは、新しい友達を作るよりも既存の友達と一緒にサッカーを楽しみたいという意向を持っている
2. 学生たちは練習よりもゲーム（試合）を中心に活動したいと考えている
3. 学生にとって部活動は「必須」ではなく、塾や地域のイベントなど他の活動と両立する「2番手」の位置づけになっている
4. 夏休みなど学校がない日にわざわざ学校に来てサッカーをするほどの強制力はクラブにはない
5. 友達が参加するかどうかが活動参加の大きな判断基準となっている

III. 地域連携の課題（ボトルネック）

1. 少子高齢化により、青少年の体験活動参加率が減少している（36.7%まで低下）
2. 経済的な面から生じる体験格差の問題
3. 女子サッカー選手の13歳～15歳での離脱率が高い（5人に1人が13歳でサッカーを辞める）
4. 豊島区では女子中学生がサッカーを続けられる環境が極めて限られている（中学校は十文字中学校のみ）
5. 公共施設の不足により、新しいチームの設立が困難である
6. 責任分担の明文化不足による連絡体制の混乱
7. 提供する価値と参加者が求める価値のミスマッチ

IV. 打ち手（解決策）の提案

1. 部活動を地域と連携して進めることで、誰でも体験できる機会創成
2. プラウドトレーニング（プラトレ）による一流本物のスキル提供
3. AIを活用したプラウドワークショップ（プラワク）の導入
① サッカーだけでなく、ストーリー作りという新たな価値を提供
4. 女子サッカーボークを豊島区全域の小中学生を対象に拡大する
5. クラブハウスの設立による地域コミュニティの活性化と多世代交流の場の創出
6. 学校施設の共同利用による地域の人々が集まる場所の提供

V. 今後の方向性

1. 特定の競技に絞るのではなく、マルチスポーツとして幅広い体験機会の提供
2. 学校単位ではなく、広域的な地域を対象とした活動展開
3. 参加者のニーズ（ゲーム中心、友達との交流など）を事前に十分調査し、メニュー考案やオペレーションに反映させる
4. 責任分担と連絡体制を明確に文書化する
5. 競技としてのスポーツだけでなく、人生におけるスポーツの位置づけを考えるストーリー作りの視点を取り入れる
6. 学校施設を地域の公共財として捉え、共同利用の仕組みを整備する
7. 3世代が集まるような地域コミュニティの場としてのクラブハウス構想を推進する

【報告*詳細】

I. はじめに・ご挨拶

1. 公開サロンではレコーディングが行われているが記録はどこにも流されない。
2. 公開サロンの内容を各自の SNS で発信することは厳禁である。

II. 参加者自己紹介

1. NPO サロン 2002 の理事長である。 (中塚)
2. 東京都で社会人、小中学生にサッカー指導の経験があり、本日が二度目の月例サロン参加である。 (望月)
3. 株式会社パルカの代表取締役である。 (石原)
4. 筑波大学附属駒場中高等学校の保健体育科の教員であり、部活動の地域移行というところに興味がある。今年度 3 回連続での公開サロン参加である。 (横尾)
5. 国際武道大学教授であり、以前高校の教員でラグビー部の指導経験がある。大学では運動部活動の研究をしている。 (嶋崎)
6. 台湾からのリモート参加。少年サッカーの指導、クラブチームの立ち上げ経験がある。 (笹原)
7. 障害者のサッカーのボランティアに参加経験があり、日野市にある総合型スポーツクラブの役員をしている。子供たちがスポーツを楽しめる環境を整えることに興味があり、本日の公開サロンに参加した。 (木村)
8. 立川市で総合型スポーツクラブを立ち上げ活動している。 (磯)
9. 筑波大附属高校関係のクラブチーム、OB／OG 会の管理をしている。 (大河原)

III. 「部活から地域クラブへの運営と課題、新たな価値創出ストーリーの描き方」

1. 投影資料 [【2025 年 10 月公開サロン（通算 348 回）】部活から地域クラブへの運営と課題、新たな価値創出ストーリーの描き方.pdf](#)
2. 発表に対しての質問、感想
 - ① 千登世橋中学校がなぜ女子サッカーを選び、なぜ PROUDERS を選んだのか。
(中塚)
 - A) 「一流・本物志向」を経営方針で掲げる千登世橋中の小林校長が、女子サッカーというものに興味を持っていった。また、弊社代表大島の元プロ、オーストラリアリーグ優勝という「一流・本物志向」の価値提供のニーズがマッチして弊社の女子サッカー指導が決まった。 (内田)
 - ② 目的が生徒確保であるなら、athletic (競技) を確立して小学生年代にアプローチをした方が生徒確保になるのではないか。 (望月)
 - A) 千登世橋中で行ったプラトレの体育授業後のアンケートでサッカーをやりたい女子生徒が 21 人おり、需要があると判断したため、競技志向ではなく play (遊び) の方向で女子サッカークラブが始まった。 (内田)
 - ③ 千登世橋中から PROUDERS にマルチスポーツの依頼があった時、具体的なマルチスポーツの案はあったのか。 (横尾)
 - A) 校長から具体的な案はなかった。しかし、多様なスポーツをやらないと、どこに才能があるかわからない考えを小林校長も持っていたことから、千

登世橋中での女子サッカークラブ導入（体育授業）ではマルチスポーツの観点で実施した。（内田）

④ プラトレやプラワクからクラブハウスへの繋がりがよくわからない。（笹原）
A) 自分の人生という名のオリジナルストーリーを描く手段・ツールとしてプラトレとプラワクを提供し、リアル（対面）で集まれる居場所をクラブハウスと考えている。しかし、「最高に誇りに想えるストーリーを描く」コンセプト以外は、まだ内容を詰めてはいない。皆様からクラブハウスのニーズや案をこの場でヒアリングしたく、女子サッカークラブから始まり、クラブハウスまで続く弊社の等身大のストーリーを共有した。（内田）

⑤ 千登世橋中での体育の授業での生徒たちの生の反応と体育の授業にどんな狙いがあったのかが気になる。（嶋崎）
A) 生の反応では「体力がつけられて良かった」、「バスケや他のスポーツでも使えそうという」意見があった。本当の好きなスポーツを見つけて欲しい狙いがあった。（大島）

⑥ 体育の授業からなぜマルチスポーツではなく、女子サッカーに行ってしまったのか。（嶋崎）
A) 授業後のアンケートのデータ（投影資料 P.22）「21 人も女子サッカーに興味がある」結果を過信してしまったのと、弊社の強みを出したくて、マルチスポーツクラブではなく女子サッカークラブに振り切った。（内田）
(ア) 少子化の影響で一つの学校ではチームを作ることができない。豊島区全域を巻き込むことができていれば本物という価値をより発揮できたのではないか。（嶋崎）

⑦ 次世代成長支援について公開サロンで話をさせてもらった内容（2024 年 7 月）と PROUDERS のストーリーの捉え方が一致している。何か一つのスポーツに絞らず、その子たちの成長を考えていくと幅が広がると考えている。（磯）

IV. ディスカッション*PROUDERS のクラブハウスに対する意見や感想

1. スポーツ等への入口としてクラブハウスは必要だが、教える・教わるの関係だけだと、放課後までもが「学校」になってしまう懸念がある。クラブハウスはスポーツや芸術に関わりながら仲間と過ごしたい人の居場所であれば良い。（中塚）
2. クラブハウスは共同利用にすべきである。少子化が進む中で地域の人が集まり、一緒にスポーツができる場所を作ることが将来のクラブハウスの望ましい姿である。（嶋崎）
3. 今の若者は、他者にあまり関心を持ってない。クラブハウスでは、多様な人と交流し、他者への思いやりなどを養う場にして欲しい。（豊田）
4. 気軽にフラットに他人とスポーツができる場になると良いのではないか。（笹原）

5. サッカーだけだと特定の子供しか集まらないので、マルチスポーツを取り入れて幅を広げる必要がある。 (木村)
6. 平日と土日の使用目的を定める。平日はマルチスポーツを回す等、人を集める施策が必要だと感じた。 (大河原)

V. おわりに・ご挨拶

1. 11 月に予定している体験教室に 5 人の応募があった。豊島区から地域連携の事例を作り、参加者のご指導や学びを受けながら、皆の居場所になれるようなクラブハウスを生み出したい。 (内田)
2. 子供達にはスポーツを通して多様な角度から自分の人生を描いていってほしい。 (大島)

VI. 次回のサロン

1. 次回は、NPO サロン 2002 公開シンポジウム 2025 <「ユース年代のサッカー」を語ろう！－U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップの 10 周年を機に>
① 参照 URL) <https://www.salon2002.net/?p=2102>

以上。